

<目的>古い町並みを残す地域に暮らす世帯の基本的属性をみた上で、住宅の移り変わりや建て替えの要因、修繕状況、現住宅への評価、さらに町並み保存についての意向等を明らかにする。

<方法>愛知県西枇杷島町を取り上げる。旧枇杷島橋西詰め地点から西に進んで現西枇杷島町境までの、旧美濃路筋に面する住宅の居住世帯を対象に、1998年11月にアンケート調査を実施した。非住宅や空地等を除く、北側90戸、南側104戸、計194戸の内、空き家等を除く160戸を対象として、110票を回収した。

<結果と考察>この地域は、江戸時代の初期から青物問屋町として繁栄し、裕福な町屋が軒を連ねていた。しかし1891(明治24)年の濃尾大地震でそれらは一旦壊滅し、直後に、近世の町屋の型式をほぼそのまま踏襲して、町が復興された。その後も青果市場として繁栄を続けたが、1955(昭和30)年に市場が名古屋市に移転してからは、転業や移動、町屋の建て替えがすすんでいる。調査結果では、すべての住宅は濃尾地震以降に建てられたもので、濃尾地震で建て替えられた住宅にその後は建て替えることなく住み続けている世帯がほぼ半数ある。これらの住宅では、間取りの使いにくさや老朽化、さらに、自動車の保管場所がないことが不満点になっているが、不満がないとする世帯も多く、住宅や地域への愛着はかなり高い。しかし、プライバシーの確保や、駐車場、設備の更新等に対する要求も高く、町並みを保存したいと考える世帯は4割弱にとどまっている。また、古い住宅の居住者の高齢化もみられる。